

展覧会情報

この冬以降開催される地図・地理・歴史に関する展覧会・展示会等についてお知らせします。

■江戸までの風景 道中風景図巻「富士山の見える風景」

会場：八代市立博物館

電話042-592-0981

会期：2005年11月5日～12月18日

■鷹見泉石の世界図・日本図

会場：古河歴史博物館

電話0280-22-5211

会期：2005年8月27日～12月23日

■第11回児童生徒地図作品展

会場：岐阜県図書館 世界分布図センター

電話058-275-5111

会期：2005年10月29日～12月28日

■伊能図と南アルプスの測量・地図展

会場：南アルプス芦安山岳館

電話055-288-2125

会期：2005年6月18日～2006年1月31日

■新収古絵図展 描かれた土佐の浦々

会場：高知県立歴史民俗資料館

電話088-862-2211

会期：2005年11月26日～2006年2月26日

■古地図の世界「江戸から東京へ」

会場：岐阜県図書館 世界分布図センター

電話058-275-5111

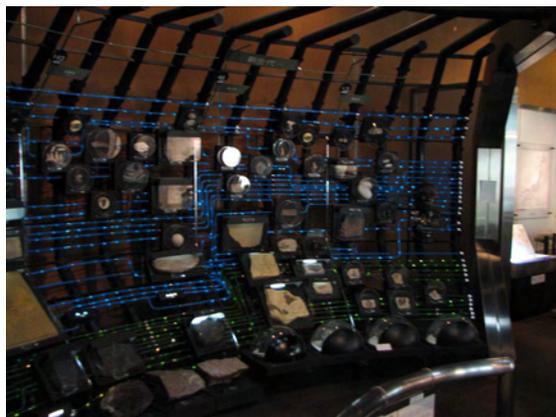
会期：2006年1月28日～3月30日

平成17年度 第1回巡検

平成17年度第1回見学会（巡検）、「つくばエクスプレスに乗って『地質標本館』を見学」は10月22日に開催されました。

当日は天気予報がはずれ、あいにくの雨。しかし新線のつくばエクスプレスはゆれも少なく快適な旅。所要時間は45分ほどでバスに比べ大きく

短縮されました。現地ではタクシーに分乗し「地質標本館」に移動。鉱物標本や化石がたくさんあり、中には触れるものも多いのが特徴。最近問題のアスベスト鉱石、石油等の資源、火山や地震関係の模型など盛りだくさんの展示に、同館ホームページの見学時間1時間ではとても見切れません。少し色づき始めた銀杏並木を見ながら、つくばセンターに帰着。解散となりました。



地図絡み

第23回 柴五郎中尉作図の「信州雲場ヶ原」 1万分1

井口悦男(帝京大学講師)

JR軽井沢駅前(新軽)と旧軽とを結ぶ、広い一本道の歩道の並木下には、蓮の葉を小ぶりにした葉に、ノウゼンカズラの朱色の花に似た、葉も花も柔らかさそうで、ピリッとした味で食べられるナスタチュームのプランターが続く。夏も終わり近く花もさすがに勢いを失いかけていた。その道に、「りんどう文庫」という古書店を見つけ、ハッとした。近ごろその名で「補充改正復刻平成15年8月」とある、加筆された2面の迅速測図が軽井沢にあることを、知人に教えられていたからである。

その図は、官設線が直江津から軽井沢に達した半年ほどの、明治22(1889)年6月完成とあり、東西方向に伸びる路線を境に、多少重複かつづてに南北で接続する2図からなる。その北側を「信州雲場ヶ原」、南側を「信州軽井沢ヶ原」と名付け、国境の小平地が牧場耕地あるいは植林地に開発されはじめた折の図である。

したがって、図は旧軽宿場の先、国境の峠にかかる斜面で終わる。南側の入山峠を通る道でも同様である。一方西側は、中山道の新旧両方が合する離散集落の少々先までとなる。その南では鳥居(井)原までである。図描北限は、現在の三笠の先の斜面を描くが、旧軽からの道もなく、家々も見えない。ただ、現旧ゴルフ場近くの平地に、ポツンと「長野県獣医学校」があるばかりで、離山の中腹までをしめす等高線の重なりが目立つ。

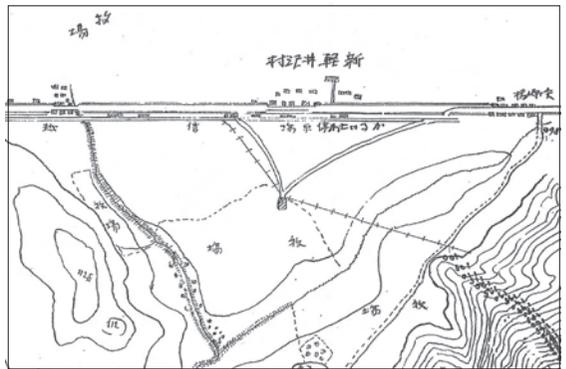
それにしても、図作成の目的は何であったらうか。図郭外左下に脇付けされた将校名が、さらに興味をそそる。「砲兵中尉 柴五郎」と、作成者名が見える。この方は、会津出身で陸軍大将に補された、北清事変(1900)のときの北京での活躍で、乃木、東郷以前にその名が世界に知られた軍人であった。しかも、まだ正式地形図測量以前に、(軽井沢付近の5万分1図は大正元(1912)年測)迅速測図を早い時期に作成していたとは、これまで触れられていないだけに、オドロキである。

もちろん、その経歴をたどれば納得されてくる。と言うのは、参謀本部所属で明治17~21(1884~88)年の間清国に駐在

し、最後の1年北京ではもっぱら周辺を含む2万5千分1兵要地誌図の完成に出歩かれる。その上帰国に朝鮮を縦断し、描図を続けられた。軽井沢付近図の作成時期は、これらに引続く。

一方、図の中心位置には当時の陸軍を代表する山縣有朋が宿泊し「雲起楼」と命名した雲場の鳥居牧場が見えることから、地方駐在師団などの演習用図という、迅速測図の一般例とは別の、軍関係者を含む軍馬育成牧場など、開発地域用と見られる。

別荘地としての軽井沢は、旧軽宿場近在に限られ、雲場池を堰止める以前のことである。また、碓氷峠をアプト式機関車や軌道で上下しない頃、軽井沢の折返しには、機関車の方向転換に、鉄製のターンテーブルによらず、三角線を使っていたことがわかる。開発地らしい施設が日本にも存在したことである。(05.11.7)



信越鉄道軽井沢駅周辺 ここが日本海からの終点のころ。牧場が点在するにすぎない小平地 大きく折返し用に三角線が取られる原野



旧軽集落の街道面配置は現在と当時とで差が見られない



軽井沢駅前から旧軽への道に続くナスタチューム花壇。少々盛りすぎて。

ICICニュース Vol.10 No.3通巻35号
発行年月日:2005年(平成17年)12月1日
編集・発行:財団法人 地図情報センター
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-5
神保町センタービル5階
Tel.03-3262-1486 Fax.03-3234-0872
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/icic/>
E-mail icic_map@yahoo.co.jp